その腕（かいな）の狭間に

目高 花子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その腕（かいな）の狭間に

【Ｎコード】
Ｎ９０７９Ｊ

【作者名】
目高　花子

【あらすじ】
国の終焉が全ての始まりでした――…よね？
前世は現代？な王女様が自分探しをするような、周りに流されているような気もしないような…。
嵐を呼ぶ事なかれ主義王女発進！

プロローグ（前書き）

※作者も明日が見えていない見切り発車作品ですので閲覧にはご注意下さい。

プロローグ

私には前世と思しき人の記憶がある。

この世に生を受け、成長するにつれ鮮明になっていく、
幸せで、温かくて、愚かしくて、そして愛(かな)しい記憶。

今の私には何一つ与えられないものにまみれていた、ワタシの記憶。

違う家族、文化、世界の中を平和に生きていた、ワタシ。
何も知らないままで不自由なく笑っていられた、ワタシ。
不慮の事故で若い内に亡くなってしまった、ワタシ。
無邪気で、優しくて、憐れで、そして残酷な、ワタシ。

この記憶は私に何を示すのか。
この記憶は私を幸せにするのか。

その答えは未だに分からないまま、時は満ちた。

国破れて何想う（1）（前書き）

※プロローグ2にしてもいい話でした。細切れで大変申し訳ないです。

国破れて何想う（1）

アウグス暦６７４年、ユリウス王国滅亡。

直接的要因は王侯貴族の腐敗政治による圧政・重税に苦しむ国民の決起だとされる。

武装蜂起した国民は隣国シーザー帝国の支援もあり、蜂起わずか一週間の早さで王城を陥落させた後、平定の名の下に王族及び有力貴族を粛清。新国王を樹立し下剋上は事実上成功した。

しかし突如としてシーザー帝国は血統による旧ユリウス王家の正統性を支持。

未だ疲弊したユリウス王国に宣戦布告し、滅亡に至らしめる。

その後、ユリウス王国はシーザー帝国ユリウス領として併合。

そしてここから全てが始まる。

国破れて何想う（2）（前書き）

※今回も主人公は出てきません…。

国破れて何想う（2）

シーザー帝国第四皇子は悩んでいた。

この度の戦で併合したユリウス領の領主として封ぜられたからである。

元来ユリウス王国は小国ではあったが土地に恵まれ豊かな国であった。
山に囲まれているという地の利もあったため他国に差ほど干渉されたこともなかった。
伝承によるとアウグス暦前よりあった伝統ある国だったという。
なので当然ながら独自の文化が発達し、言語も公用語こそ使っているもののヒドく訛っていて分からないものもある。

しかも大変排他的で保守的である。

端的に言えば、彼は統治することにさっそく行き詰まっていた。

『あの使えないクソ狸ども、何かと言えばやれ伝統だ血統だなんだ…今はそれよりやんなきゃなんないことあんの分かんねーのかよ！！』

一人黙々執務室の中で書類を確認しながら彼は心の中で罵詈雑言を

並べたてる。

今領内の状況は最悪だと断言して言える。

戦火の爪痕は思いの外深く、城下の街は跡形もなく燃えてなくなり生き残った人々はそこに簡易テントをはり、帝国より日々少量ずつ配給される生活物資で飢えを凌いでいた。

当然経済活動は不可能な状態だ。

更に壊滅的なのは農作物だった。

畑は踏み荒らされ、生産者は殺され、無人化した村が幾つもあると報告されている。

これでは冬を越す前に餓死者が増える一方だ。

それなのに貴族達ー下剋上前の一は領民には我関せずで如何に城内で自分の権力を強めるかばかり考えている。

しかも未だにシーザー帝国を格下に見る風潮は抜けきっておらず、領主の自分にもあからさまに嘲笑を寄越し、表面上は取り繕っていても悉く自分の案を却下するのである。

だからと言ってこれといった建設的な案をだすでもなく、のらりくらりと税を免れようとばかりする。

それこそ粛清してやりたいとつい思わずにはいられない。

しかし実際にはそうもいかなかった。

シーザー帝国は旧王家を支持するという大義名分で新王家を打倒したため、体制は結局蜂起前に戻っているのだ。

事実、帝国が攻め入った時も彼らは新王家への不満から応戦しようとはしなかった。
それが評価されて彼らはめでたく復権したのだが…。

血統主義が過ぎるのだ。

口を開けば新王家の浅ましさから始まり、自分の血統が如何に正統かを自慢し、終いには旧王家復古を謳いだす始末。しかも全員でだ。

それを毎日繰り返されて、しかも進まない復興。彼はノイローゼにでもなりそうだった。

もし仮に旧王家に生き残りがいれば彼とて取れる方法は幾らかある。

しかし、旧王家への粛清は直系どころか傍系にまで及んでおり、生き残りは皆無に近いと思われた。

そんな彼に旧王家生存者発見の一報が入ったのはその日の夜のこと

だった。

国破れて何想う（3）（前書き）

今回も話が全く進みません。
そして人名が誰一人でてこない神秘・・・。

国破れて何想う（3）

シーザー帝国の第四皇子は悩んでいた。

旧王家の生存者がいるとの一報でクソ狸（貴族）どもに見つかる前に保護しようと、善は急げとばかりに護衛幾人かと日の出と共に馬で駆けてきたのは良かったのだが、

「ここは樹海か？むしろ腐海なのか…？」

「此処は森です、殿下」

護衛にさらりと受け流されたのでもう多くは語るまいと口を噤むが、太陽光が射さないほど鬱蒼としすぎていてなおかつ民家どころか人っ子一人見つからない森を進むのはなんとも心細いものがある。

更に先ほどから似たような景色ばかり見えているのもその一因だろう。

そうまるで抜け出せない迷路に迷い込んだかのような……同じ景色？

「なあ、もしかしてこれ迷ってるんじゃ・・」

「……まかさ、ありえませせん」

「おまえの噛み方がありえない…」

「緊張をほぐすちょっとした緩和剤です」

「……正直に言え、迷ったんだな？」

「そうなん（遭難）です」

「…地図を貸せ、とりあえず現在地を確認せねば。最悪野宿だ、覚悟しておけ」

さあ地図をと差し伸ばした手に、だが何かが乗ることはなかった。
オロオロとした瞳で見つめてくる総勢３人の護衛たち。
嫌な予感がした。そこはかとなく、だ。

誰か、胃薬をくれ。

「恐縮ですが殿下、地図はありません」
護衛Ａが恐る恐る答える。

「補佐殿曰く情報（ネタ）は王家の機密文章内に載っていただけで、そこにはこの森としか書かれていなかったとのことです」
護衛Ｂが慌てて付け加えるように言う。

「野宿なんて先の戦（いくさ）以来です殿下。とりあえず班決めをしましょう、私は薪集め班がいいです」
ウキウキ感を隠しきれずに護衛Ｃが語りかける。

ああ、神よ。
俺は貴方に嫌われることをしたのだろうか。

「少なくともユリウスの民には嫌われてるんじゃない？」

それを言われると立つ瀬がない……

「ってお前、誰だ？！」

言うよりもはやく、その人物の首もとには三本の剣があてられていた。

さすが腐っても護衛である。先程の間抜けぶりなどなんのその、冷徹な三組の双眸は確実に不審人物の急所に向けられている。
そう、そして自分は腐っても皇族だったのである。普段の扱いで忘れそうなところだったが。

場の空気に緊張が走る。

真っ正面からみとめたその人物は漆黒のフード付きローブを深く被っていて、顔も見えない。
例えるならば御伽噺に出てくる魔女の風貌そのものだ。
街であったら関わり合いたくない類の、如何にもな怪しさが滲み出ている。

「もう一度聞く、お前は何だ」

射るような眼差しは見えずとも、威嚇するような低い声はそれだけでも相手を畏縮させる響きを与える。

すると弱々しくヒュッと息を吸う音が聞こえたと思ったら途端に黒い影が縮んだ。

縮んだ、というより這いつくばったという方が正しいのか。
急な動きに驚くよりも、その人物の行動は早かった。

「すいません、ごめんなさい、調子乗りました、申し訳ありませんでしたぁー！！」

彼の皇子、後に語る。
その謝罪の様子、正に黒い蛙が飛び跳ねていたかのようであり、到底真似できない儀式のようであった、と。

国破れて何想う（4）

シーザー帝国の第四皇子は悩んでいた。

「いやぁ、旦那方もお人が悪い。道に迷ったてんなら言って下されば教えしましたのに、まぁあたしのこの姿があまりに先鋭的ってのは分かりますがね」

「いや、本当にすまなかったな。うちの主人ちょっと早とちりしちゃう子なんだ、悪く思わないでくれ。でも先鋭的ってなんだ、黒さん」

「いいってことですよ、旦那方。ここは還らずの森って言われるほど迷いやすい場所なんですわ。あたしに出会えて本当に幸運でしたよ、ファッショナブルなこのあたしに、ね」

「あぁ、本当にありがたい。野宿の覚悟をしろってうちの主人が脅してくるもんだからなぁ、黒さんとこ泊めてもらえるなんてラッキーだったよ。ところでファッショナブルってなんだい、黒さん」

「鄙びたとこで申し訳ないもんで、あんまり期待しねぇで下さいね。奥さまとあたしだけしかいねぇもんだからなんのお構いもできないんでね。トレンドを自負してるあたしとしちゃあ恥ずかしい限りなんですよ」

「気を使わないでくれ、黒さん。迷った俺らが悪いんだ、うちの主人の部下なんて地図も与えてくれないんだぜ？使えないよな、全く。ちなみにトレンドってなんなの、黒さん」

先ほどから繰り出されている会話とこの妙な状況に、だ。

なぜ、俺が馬をひいていて不審人物――黒さんと呼ばれている――が俺の馬の背に乗っているのだろう。
なぜ、護衛達はあんなに仲良くその不審人物と話しているのだろう。

そもそもなぜ、こんなに広大な森で都合よく人間に出会えるんだ。
あの黒いのが旧王家に仕えていたとは考えにくい。
あまりに無防備だし、なんというかオーラはあるが気品はない。
王家なめんな、だ。
だがしかし迷っている俺たちの前にこの森の住人だと語る奴が現れるなど、出来すぎているにもほどがあり、怪しすぎる。どこぞの刺客であってもおかしくないのだ。
そして不審者をさっさと信じて今日の住居とやらにありつこうと、嬉々として案内させている護衛達(こいつら)もまたおかしいと言えばおかしい、頭が。

それに何より、一番言いたかったのはこれだ。
ニコニコ笑いながら言語形而上で攻防するのをやめろ、妥協を覚えろ、空気読め。
しかも婉曲的ながらに俺へ毒はいた奴、帰ったら城裏に来い。

とにかく、今願うことは一つ。
どうか目的地にたどり着くまで、俺、憤(し)死に給うことなかれ。

国破れて何想う（４）（後書き）

話が進まない。。。
見切り発車というか尻切れトンボでした。。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9079j/

その腕（かいな）の狭間に

2010年10月9日00時33分発行